

## 泰緬鉄道の子劇と真実

永瀬 隆

本講演は、就実高等学校（岡山市）の『はぐるま』第一七号（一九九四）から転載させていただいたものである。転載を乞ふ快諾下さった森尚先生に厚くお礼申し上げます。平和教育や同和教育に力を注ぎ、良き成果を挙げておられる同校に対して心から敬意を表したい。このような教育を受けた若者の将来が楽しみである。

皆さん、こんにちは。

まず、従軍慰安婦の話を一つして、それから泰緬鉄道の話に移ります。

今問題になっていきます従軍慰安婦のことですが、皆さんも、いろいろなことに目覚める頃ですから、人には聞けないけれど、何か心にかかり、そして興味のある気持ちはもっていると思います。

## 従軍慰安婦との出会い

従軍慰安婦というのは、むかし日本がシベリア地方に、ロシアに革命

が起きた時に、日本軍を出兵したことがありました。その時日本の兵隊が多く性病にかかったことがあり、またその後の戦争で日本兵がその土地の女性を強姦することが多かったので、日本軍のお偉い方々が、これではいけないと、特別に軍隊専用の慰安所というのをつくり、兵隊の遊ぶ相手の女性を連れて来て住ませたわけです。その女性を従軍慰安婦というのです。

一九四二年の後半、私はシンガポールの対岸にある島にいました。当地

はマレイ語でブラカンマチー——日本語で『死後の島』と呼ばれていました。現在のセントサ島で、有名なリゾート地で、戦争博物館のあるところでした。

そこに第三航空軍の燃料補給部隊があり、私はそこに通訳として派遣されてきました。航空隊だから、いい格好だな、なんて思われると大間違いで、燃料補給隊というのは、飛行機の燃料のドラム缶を転がす部隊です。

そのドラム缶を転がすために連合

軍の捕虜が四百人ほどいて、その通訳をするために私は派遣されたのです。しかしその部隊付になって行ってみると、その部隊の兵隊さんたちは、それぞれブローコン・イングリッシュで捕虜と結構うまくやっているのです、私は何もすることがなくその島の子供たちを集めて、日本語を教えていました。

ある日、部隊長に『通訳、ちょっと来い』と呼ばれて行ってみますと、毎日うまいものを食べて、島の王様のような気分になっている、油ぎった小太りの隊長は、『近い内に、この部隊に朝鮮人慰安婦が来ることになった。日本語があまり出来ないの、お前は暇なようだから、彼女たちに日本語を教え、兵隊との間がうまくゆくよう努めよ』とお言葉です。

私は心の中で『この野郎』と思いましたが、上官の命は天皇の命になるぞ、と平常軍隊で教えられているので、嫌々ながら『はい』と答えました。これが日本の天皇の軍隊です。やがて、十二、三人の慰安婦が部隊にまいり、慰安所を開設するのにな、三週間かかるので、その間、私は彼女たちに日本語を教えました。当時朝鮮は日本の植民地だったので、彼女たちも或程度は日本語は知っていました。

そして二回三回と教えているうちに、彼女たちもだんだん私に慣れて来て、いろいろな話をしてくれるようになった。

ここでちょっと陸軍通訳というものについて話しておきます。陸軍通訳というのは職名でして、陸軍の通訳というばくせんとしたものではあ

りません。昔あった陸軍省の役人なのです。軍で働いている兵隊以外はすべて軍属と云っていますが、いろいろあります。兵隊は給料が安く、私たちは、彼らの十倍ももらってましたから、彼らは私たち軍属を『軍賊』と呼んでいました。だから、この従軍慰安婦も、ある意味では軍属だったわけです。

とにかく兵隊ではないという、気安さも手伝って、彼女たちは私に、自分たちの胸の内、境遇を聞いてもらいたかったのでしょうか、私にいろいろな話を話しました。

慰安婦たちは『まあ、聞いて下さい。私たちは、南方の日本軍のいる地域で、軍の食堂で女性給仕を募集しているからと聞いて、日本円で百円の支度金、——これはその当時としては、貧しい朝鮮の植民地の人に

とっては大金です。その金で自分の家族を養うために、はるか異国へ身を切るような思いで、出て来たわけです。泣く泣くその家族と別れて来た」というのです。

「そして来て見れば、慰安婦として、女性として最も恥ずかしい、思っても寄らぬ仕事につけ、つまり兵隊に身を任せて、稼げ」というわけです。

「軍のいうことを聞かないと、どんなことになるかも知れないし、帰るに帰れないから仕方なく諦めて、そういう務めをします、悲しいことです」と皆が私に泣いて訴えました。しかし、私は一介の通訳ですから、「軍はひどいことをするなあ、これが天皇の軍隊か」と疑問を感じましたが、慰める言葉もありませんでした。

せていたわけです。  
これが日本の天皇の軍隊の将校だったのです。そして、その少年兵は毎晩隊長のそばで性行為のお手伝いをさせられていたわけです。

「通訳の兄さん、私はお国の為に志願して来て、ここでこんなことをさせられて、全く来るのではなかった」と、今度は私にもたれかかって、さめざめと泣くのです。私も肩をだいてやりながら、慰める言葉もなかったです。これが天皇の軍隊かとだんだん批判的に軍隊を見るようになりました。あの当時の十五、六の少年たちは、この頃の同年齢の少年少女のようにはませていません、お国のために命をなげ出して志願して戦地に来ている位だから純粹です。そういう人たちがあのような事をさせられた気持ちをごさんに察してもらい

そのうち慰安所が出来、彼女たちも忙しくなり、日本語を教える必要もなくなりました。

ある日のこと、私は島の小高い丘の上で、インド洋作戦を了えて帰役してくる海軍の航空母艦、戦艦、巡洋艦などの艦隊が意気揚々、威風堂々と島の沖を通過するのをうれしく眺めていました。

そうしていると、どこかで男の子の泣く声が聞こえてきました。あたりを見廻すと、私のいるすぐ後に岩があり、その岩の後から、その泣き声が聞こえて来ます。あ、最近この部隊に配属になった少年兵が日本が恋しくなって泣いているんだなと思って、声をかけました。少年兵といっても、私と同じような軍属です。十五、六才ぐらいですから、あなた方とはぼ同じ年です。軍隊には、兵隊

たいと思います。

話はすこし下がりますが、私だつて二十二才の男ですから、気の毒な慰安婦だなどは思っても、矢張り男ですから、彼女たちのところへ遊びに行きたかったですよ。しかし、いやしくも私は彼女たちには日本語の先生だったでしょう。いわゆる師弟の関係ですから、行きたくても行けなかったです。この頃は『高校教師』なんてテレビ映画があるけど、(笑い)、一応師弟の関係になった以上は、やはりそんなことをしてはいけないと自分にいい聞かせて、残念ながら、我慢しました。(笑い)

いまのお話のように植民地の婦人と同時に日本の少年たちまで、天皇制軍隊の制度のもとで、心身ともに墮落させられたことを、今日は頭に入れておいて下さい。こういう話は

を使うにはもったいないようなこまごました仕事があります。そのような仕事、つまり使い走りをするような仕事のために内地から連れて来られた少年なのです、私と同じ軍属ですから、彼らは私を兄さん、兄さんと慕ってくれていました。その四人の少年兵の一人が岩のかけで、しくしくと泣いておりました。

どうしたのかと聴いてみたが仲々話してくれません。なだめすかしたあげく、ようやく話してくれたのが次のようなことです。

あの小太りの隊長は、島の王様になつている気分だとい、ましたが、全くその通りで、彼は慰安所ができて、兵隊が女たちの所へ行く前に、つまり隊長は慰安婦を兵隊たちに配給する前に、毎晩一人づつ、はべらしていたのです。つまり添い寝をさ

だれもあなた方乙女には話さないと  
思います、私もかつて女子高校の先生をしたことがあります、その梓を離れて今日は意を決してお話しております。

敗戦そして「軍票事件」

それから、一九四六年、戦争が終わった翌年です。私はその時、タイ国はバンコック市の旧獣医学学校の収容所、日本軍終戦処理司令部の通訳班で働いておりました。終戦処理の仕事もようやく終了し、近々、アメリカの貨物船で日本へ帰還できるという状態で、仕事も一段落してホッとして、希望をもって帰る船を待っていた頃のことです。

ある朝、通訳班室でポヤッとしている、門のそばのオランダの衛兵が走って来て、"too many Chi-

ness girls」と私をうながすので、走って行ってみますと、ツーピースの中国服、それも晴衣を着た十四、五人の若い女性が、捕虜の日本兵を監視している収容所の門の衛兵所でワイワイ、ガヤガヤと騒いでいます。みな口紅もつけきれいに化粧していません。長い間、女性にご無沙汰していた私も胸がドキンとしましたね。しかし、見た瞬間これは中国人慰安婦だと直感しました。

彼女たちの話す独特の日本語です。話があるから、隊長さんに会わせて下さい」とのことで、彼女たちを通訳室に連れて入り、また司令部のお偉い上官、参謀長の大佐に来てもらって話をき聞くことになりました。そこらあたりには連中も半分は好奇心も手伝って、いったい彼女たちは何しに来たのか、現在の捕虜の自

分たちは何もしてやれないのと思つて、聞き耳を立てました。

彼女たちも久し振りに日本の兵隊たちに囲まれて、すこし上気した顔つきで、皆で顔を見あわせ、頷きあつて、ツーピースの上着を一齐に脱ぎました。兵隊たちがアッとおどろくの尻目に、サッと上衣を脱いだ彼女たちは、その下の胴に五センチぐらいの厚さで幅十センチの厚い帯をぐるりと皆巻いていました。そこには金が入っていました。

まったく大金です。しかしこれは軍票だったので。軍票というのは、軍が占領地域で発行する金のこと、その地域住民に強制的に流通させるもので、今まで持っていた金は全部使えなくして軍票だけを流通させたのです。

彼女たちが持っていたのは、戦争

が終わったときビルマに居たので、そのビルマの軍票です。日本が敗けて、その軍票は無価値になってしまっていたのです。

彼女たちが今日この終戦処理指令部へ来たのは、その軍票をタイの金に換えてもらいたいからなのです。

彼女たちの話によれば、「五年前、自分たちの故郷である中国揚子江の沿岸の江西省で日本軍に強制連行されて、ある師団の慰安婦にされ、中国の奥地からビルマに渡り、ずっと兵隊たちの相手をさせられ、敗戦になってタイ国へ日本軍と共にやって来た。このタイ国に残された私たちは、せめてこの軍票をタイの金に換えてもらい、ここで生活したいのだ」とのことでした。

ところが日本軍は敗戦によって、もっている金は全部連合軍に報告し

たことになっている。実際かくし金をもっているも、それを彼女たちの軍票に換えるほどではない。おそらく彼女たちの一人一人が持っている軍票は、五年間、兵隊たちの相手をして得た軍票なので相当の金額です。今の日本の円に換算すれば何億という金でしょう。

そこで仕方がないので、金を換えてあげるのは連合軍の命令違反で処罰されるのでできないし、また持っているのだと彼女たちを説得しました。

何時間もかかっています。そのうちに彼女たちも換金不可能ということがわかってきて、「私たちは長い間、日本の兵隊さんと戦争の間じゅう一緒に生活してきた。あるときは河をわたるのに兵隊さんの後について裸足になって行きて行き、雨の日も風

の日も移動のときは一緒に兵隊と歩いた。日本語も分かるようになっていたので、私たちはもう半分は日本人になっている。どうか日本へ連れて行って下さい。日本へ行けば、私たちはどうにかして食べてゆきます」と泣きながら私たちに訴えました。

日本側はシュンとしてしまつて黙っています。日本軍が彼女たちを連れて帰ることは連合軍命令でできないのです。今では連合軍の国民になっている彼女を連れて帰ることなんて、無理なこと。ついこの間まで日本軍に身をまかせていたことそれ自体人権問題です。それもできないと私たちは断りました。彼女たちにしても故郷に帰ることができてもそこでは日本軍に協力したと白い眼で見られるだけのことだったので。むしろ日本について行きたかったので

しょう。

その時、ふつと私が思ったのは、バンコック市にある中華総商会のことです。実は私たちの司令部は、そこを接収して戦争中は居を構えていたわけです。中華総商会というのは、タイ国の中国人華僑の組織です。華僑全般の問題を取りきつっている自治体みたいなものです。一種の外交館みたいな代表事務をやっている。私がそこで相談してみたらというのと、皆がそれがいいと、言い出しつべの私に、全部押しつけて、まかせて、ホッとした態度です。

仕方がないので私はバスをしたってもらい、すぐにシイロム街の中華総商会へ彼女たちをつれて行きました。

ところが中華総商会へ行ってみても、向こうはそんなお荷物を今になつ

でもって来て押しつけられても迷惑以外の何ものでもありません。といって放っておくわけにもゆかないし、向こうもほんとに困っておりました。一時間、二時間、押問答のあったあげく、彼らは窮余の一策と考えたのが、中国系寺院にある附属の孤児院であずかるということです。孤児院というのは今ではあまり使われない言葉ですが、ホームレス、親や親族のいない子供たちを教育する施設です。

中華総商会の人は、ついでだから、私にそこまで彼女たちを連れて行ってくれと、道案内をつけてくれたので、私も後始末をしなければと、彼女たちを送って行きました。三、四軒の寺院だったと思いますが、電話がしてあったとみえて、その寺院の門のところに、それぞれ中年の女性

が立って待っていてくれました。そして黙って、彼女たちの肩を抱いて一人づつ連れて入って行きました。一軒の寺に、三、四人づつ置いてきました。しかし彼女たちのだれも、はくれなかったですよ。

はつきり言って、私は朝から晩のそのときまで、彼女たちについて世話をしたわけですから、一言の挨拶もなく、後を振りむきもしないで、トボトボと去って行く彼女たちには私もすこしがっかりしましたが、しかし彼女たちのあときの気持が分かるような気もします。あなた方にはわかってもらえますか。(間、会場は水をうったように静まりかえった)そして、私は帰りのバスの中で思ったのですが、私たちには「国敗レテ山河アリ」で戦争に敗けても帰れる

国があると、あの吉備平野のたわわにみえる水田の稲が眼に浮かんできました。それにひきかえ、彼女たちは自分の故郷からむりに連行され、自分の青春を日本軍によって踏みにじられ、苦しい思いをして得た金は完全に無価値になり、異国にひとり取り残されねばならなかった。戦争というものは全然関係のない無辜の民をこのような酷い目にあわせるのです。可愛想でしょう。こういうことを日本軍は平気でやっているのです。

「従軍慰安婦だったあなたへ」

さて、この間京都へ行った帰りに、日本弁護士会という団体が戦後処理の会合を行い、私もそこへ行っての帰りですが、帰りの電車のなかで、買ってきた『京都新聞』を見ると、

大野新という有名な詩人が、兵庫県上の寝屋川市に住む、同じく詩人の井上俊夫さんの詩集を紹介しているのが目にとまりました。その人が慰安婦について、兵隊の目から見た慰安婦について詩を書いているのです。私は今まで兵隊たちは、あれほど世話になったのに、どうして口を拭って黙っているのかと考えていましたので、紹介されてあるその詩の一部をみて、非常にびっくりしました。前述したように慰安婦というものは、性病、強姦をさけるためにつくった軍の一種の人身御供、あるいは防護策だと思っていました。しかしこの詩を読んでもみると、兵士たちがどんな気持ちで慰安婦に接していたかが赤裸々に書いてあります。当時の兵隊の気持ち、天皇の命令で侵略戦争に狩り出され、青春のまった大中、

人殺しの戦闘を毎日やらされていた彼らの思いがこもっている詩がありますので、すこし読ませていただきます。あまり上手な読み方ではありませんが、当時の兵隊さんになった気持ちで一生懸命読みます。どうか彼らの心情を察してやって下さい。

私たち兵士は命がけの作戦を終えて、辛くも後方基地にたどり着いた時、小銃や弾丸や手榴弾、その他数々の重い装具もなにもかまかなぐり捨て、貫ったばかりの軍票と外出許可証を握りしめて、あなた方がたむろする館にまっしぐらに駆けつけ、あなた方の白い胸に顔を埋めるのだった。

つい昨日まで、果てしなく続く曠野を、凶暴な意志に貫かれた一団となって突き進み、田畑

を無造作に踏みじり、村落に乗り込み、村落を通過しては、米や野菜や鶏や酒をかすめとってきた手で、逃げまどう敵の隊列を機関銃で掃射してきた手で、目の前の敵兵を銃剣で突き殺してきた手で、敵弾に斃れた戦友の屍を野末に葬ってきた手で、私たちはがむしゃらにあなた方を抱きしめた。

たとえ限られた短時間にせよ、あなた方の側近くにおいて、あなた方の髪の毛の匂いを嗅ぎ、あなた方の胸の上に手をおき、あなた方の顔をみつめ、あなた方の囁きを聞き、あなた方の小耳をいじくり、あなた方の唇を盗んでいる時だけ、私たち兵士は幸せだった。

もしもあなた方が戦場にいな



かったら、私たち兵士はいいなにを望みに生きていけたらろう。青春の望みも、人間性すら奪われた軍隊生活の中では、あなた方に逢えることが、私たちのただ一つの生き甲斐だった。ただ一つの愉快だったのだ。

これは「従軍慰安婦だったあなたへ」という、井上俊夫というかつて兵隊で、現在は、大阪の帝塚山学院大学の先生をしておられる方の詩の一節でした。

私たちの年代のいわゆる戦中派は、あれが侵略戦争であったとは知らずに、教育勸語という天皇の言葉で教育されて育った私たちは、「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」と五十年前、勇んで戦場に出かけて行きました。あなた方も最近テレビで、五十年前の学生たちが雨の中を神宮競技場を

行進して、戦争に行ったのを見たことでしょう。

私たちは本当に天皇陛下のためであると信じて、一生懸命、自分の身を捨てて戦ってきたわけで、そしてその束の間の熱いを与えてくれたのは、こういう従軍慰安婦さんだったのです。私もこういう詩は今までに読んだことはありません。従軍慰安婦は、売春婦だ、性の吐け口だといえますけれど、当時の兵隊さんには、天使だったのです。

話は前に戻りますが、あの中国の慰安婦が「私たちを日本に連れて帰って下さい。もう半分日本人なのです。日本で何とかしてやってゆきます」と、私たちに必死に叫んだ言葉を思い出してやって下さい。それも出来なかったし、今では何もしてやっていない日本の政府をどう思いますか。

みんな天皇の命令で、五十年前、日本の政府がやったことです。

私は今でもバンコックへ時々行っています。そして中国系のお寺の前を通るごとに、胸に錐をさし込まれるような痛みを感じます。

#### 泰緬鉄道と私

次に泰緬鉄道のことについてお話しします。泰緬鉄道というのは、インド侵略のために、日本軍がタイ国とビルマ、今はミャンマーの間を結ぶために建設した四百十五キロにわたる単線軌道の鉄道線路です。首都バンコックと当時のラングーン、今のヤンゴンを結んだものです。というのはマレー半島の両側の南支那海とインド洋では連合軍の潜水艦と航空機が日本の海上輸送路をほとんど完全に遮断していたので、日本の

大本営、つまり東京にある天皇の司令部は、急いで、タイ国側のノンブ、ラドックよりビルマのタンピサヤマで鉄道線路を敷いて、陸上の輸送路をつくることになりました。一九四二年五月頃でした。長さは東京駅から関ヶ原まで位の距離です。

現在クワイ河と呼ばれる、ケオノイ河に沿って、できるだけ建設期間の長くかかるトンネルは避けて、もの凄いい勢いでつくりました。

そして建設の労働力に使ったのが連合軍の捕虜です。マライやシンガポールの収容所でゴロゴロしていても退屈だろうから、タイ国の避暑地へ行った方が良いだろうと、病氣中の捕虜までだましてタイとビルマの国境地帯のジャングルで働かせました。

ところがこの国境地帯たるや、世

界に悪名高い悪疫、瘧疾マラリアの地、つまりひどい病気は何でもあるという地域なのです。コレラ、ペストであるのですから、私もこれには震えあがったことがあります。このほか腸チブス、悪性下痢、アミーバ赤痢、マラ

三千人ぐらい死にました。負傷者、熱帯潰瘍をひろがらさないため、手足を切り落としたもの、それも麻酔薬がないので、おち切った結果です。病人、まだ英本国で五十年たった今も植物人間となって病院にいます。

病と呼ばれるもので、これにかかる一、二、三日で熱のために脳障害をおこして絶命します。私自身マラリアにかかったことがあります。すごく悪い気分になって発熱前、地獄にひきずりこまれるような気分になります。おまけに捕虜はパン食をさせられなかったので脚氣が多く、また熱帯潰瘍といって傷口から細菌が入り、二、三日で骨までくさるのがありました。そこで建設工事を強制的にやらせて酷使したものですから

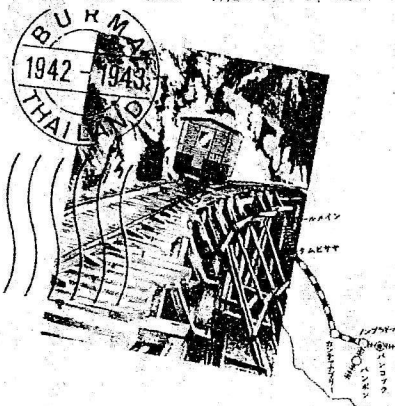
短期間にこれだけの鉄道をつくるためにはまだ人手不足なので、日本軍はその占領地域であるビルマから十八万人、マレー、シンガポールから八万人、インドネシアから四万五千の労働者を強制連行して、このジャングルの中で酷使したわけです。このほとんど三十万人にも及ぶ労働者たちは、南支那海とインド洋からのモンスーン、季節風の合流点である最悪の気候のなかで働いたわけです。虎に食われて死んだ労働者もかなりいました。

つまり、日本軍一万二千人をこれ

# 「戦場にかける橋」 のウソと真実

永瀬 隆

言説ブックレット No.69



の戦後処理の問題は  
ますますクローズアッ  
プされてくると思い  
ます。お茶漬民族の  
日本には彼ら白人達  
の執念という怨念は  
わかっていないよう  
です。

結局、捕虜は、建  
設終了後日本に輸送

に足すと総動員数四十万人の人々が、  
この酷熱のジャングルで働き、もし  
て半数が倒れ、傷ついたので。  
そして今年がその泰緬鉄道が完成  
して五十周年にあたります。今年の  
十月二十五日です。先日もオランダ  
の首相がタイ国の現地にある連合軍  
墓地で「まだ日本政府の戦後処理は  
終わっていない」と言ったとロイター  
電は伝えてきています。これからこ

される途中、アメリカの潜水艦に撃  
沈されて死んだ人数を入れると二万  
人の死者、そして労務者は半数が未  
だ帰国していません。さて日本軍の  
犠牲者はいえ、一万二千人のう  
ち、八十二人です。しかし日本政府  
はこれを千人死んだと発表していま  
す。今も昔も日本政府は大ウソつき  
であることに変わりありません。  
ここで私のいました憲兵隊につい

てお話をしておきます。憲兵隊とい  
うのは要するに軍隊の警察です。兵  
隊の日常生活の規律や機密を守り、  
犯罪を摘発したりする部隊です。特  
に戦地では情報を入手したり、スパ  
イを相手に戦ったりするのが、特高  
班です。私はその特高班にいました。  
毎日憲兵といっしょに捕虜収容所を  
視察して歩くのが仕事でした。彼ら  
の思想状況を話しながら入手するの  
です。また敵が月夜、満月の夜にイ  
ンドのカルカッタからB二九でやっ  
て来て、一団のスパイを投下するの  
です。月夜に合うように青色のパラ  
シュートで降下してくると、タイ国  
の警察が日本軍に知らせてくれるの  
で、それを追っかけて行って訊問し  
たり、また夜通し、腰に二丁拳銃を  
つけて山野を駆けめぐったりしまし  
た。夜通し歩いていると、その草

むらがやわらかく蒲団みたいに思え  
て、寝たこともありました。

敗戦になりまして、私は前に慰安  
婦の話にあった、バンコック市内の  
終戦処理司令部に帰りました。お蔭  
で私は戦犯部隊となった憲兵隊のリ  
ストから外されて、戦犯をまぬがれ  
ることになりました。鉄道隊、捕虜  
収容所部隊が三大戦犯部隊として連  
合軍から指名されたのです。そして  
あちこちで戦争犯罪者の摘発が行わ  
れ始めました。

ちょうどそんな時、つまり一九四  
五年九月の中旬に、連合軍司令部か  
ら一通の命令書がまいりました。九  
月二十二日に通訳を一名出せ、泰緬  
鉄道の地理に明るい通訳を出せ、と  
いう命令でした。通訳班の班長とい  
うのが、実は私の同窓の先輩でして、  
平生私を可愛がってくれていた人で

すが、彼が私を指名したわけでは  
行けば、私は捕虜たちに顔を知られ  
ているかも知れないので危ないなど  
思ったけど、その班長の云うことな  
ので、断ることも出来ず、嫌々なが  
ら指定された日に、指定された場所  
へ出頭しました。私はつかまえられ  
れば、他の憲兵たちのやったことの  
証人にされるのが嫌だったので。  
長い間同じ釜の飯を食っているのに  
裏切ることになりましたからね。

さて指定された駅に行ってみると、  
連合軍の連中が来て、一行は十三人  
ほどでしたが、ほとんどが元捕虜で  
す。いやに背が高く思えましたね。  
この部隊は泰緬鉄道の沿線に散らばっ  
て埋められている同僚つまり捕虜の  
墓地の捜索に行くのでした。三週間  
にわたって私はその四百十五キロの  
沿線を文字通り、木の根、草の葉を

わけて捜索しました。その結果、捕  
虜の墓地は二百二十ヶ所、墓の数は  
一万二千余りでした。ある時は遺体  
を掘り起こして埋めてあったものを、  
書類とか映画フィルムを取り出した  
りしました。そして後始末、つまり  
新しく立派な墓地をつくるため準備  
をしたわけでした。また発掘した書類  
は後で戦争犯罪の証拠書類にもなっ  
たわけです。そして連合軍の墓地が  
あるところには必ずといってよいほ  
ど、労務者の墓地があるのです。連  
合軍の墓地の方は、日本軍があわて  
て整理しましたが、労務者たちの  
は放置されて、土饅頭をつくって、そ  
の上に割木がつっ立っているのはよ  
い方で、死んだところにそのまま土  
をかけられたり、谷川に放り込まれ  
たりされたそうです。特にコレラが  
流行した時はひどかったと聞いてい

ます。

雨季があけて、いろんな建設工事が始まると、沿線どころか、かつて五十年前収容所があった町のなかから、たくさん労働者たちの遺骨が発掘されており、それくらい悪逆無道なことをしている。

とにかく、この強制連行された労働者たちは出身地で調査してみると大体半数ぐらいいまだ五十年たっても帰ってきていないのです。戦争というものは無惨なものです。

たとえば泰緬鉄道とは地つづきのビルマで、労役がひどく逃げて帰りますね。そうすると翌朝、村長さんが来て、「昨日帰ったそうだね。昨夜はよく眠れただろう。ごころう様だが、早速今日、現場へ帰ってくれ。日本軍がうるさいし、見つかったらたいへんな事になる」と言って、ま

た泰緬鉄道の現場へ追い返される。だから今度逃亡しても、自分の家に帰れなくて、一家離散の運命となる。戦争というものは、全然関係のない民衆をもズタズタにするのです。

#### 戦後処理をしない日本

ところでこのように迷惑をかけたアジアのひとたちに、日本はすこしも戦後の処理をしていない。この泰緬鉄道で働いた労働者たちに賃金をまだ払っていません。最初すこし払ったが、日本は戦争に敗けたのだからといって、そのまま知らぬ顔の半兵衛をきめこんで済ましている。戦争中、日本はアジアの若者たちを、東洋平和のための聖戦だといって日本軍の手助けをする「兵捕」をつくって、作戦に協力させ、給料のうち半分を強制貯金させて、これもそのま

ま、占領の各地が発行した軍票もそのまま。この間ホンコンの元兵捕の人たちが怒って東京まで来ていたね。全部戦争に敗けたのだからの故にして放置している。

ところが、同じ敗戦国のドイツでは、ナチスが行ったユダヤ人六百万人の虐殺も、賠償金を、来世紀まで支払うことになっている。一企業のベンツ社でさえ、戦時中に使用した捕虜や労働者に対してまだ賃金を払って補償しているのが現状です。そして戦争に勝ったアメリカ、カナダは、戦争中の自国民であった日系市民にさえも、強制収容したことを政府がちゃんと詫びて、一人づつ二万ドル(当時の金で三百万円)を支払っている。戦争中偶然アメリカ旅行していた山口のある坊さんは、運わるくつかまって終戦まで抑留された。そ

うすると二、三年前のことアメリカ政府の役人がわざわざ山口の田舎まで訪ねて来て、政府の詫び状と、二万ドルを持参している。その坊さん曰く、「やはりアメリカはちがう。立派な国だのう」と。

日本は天皇制軍隊でおよそ十五年前にわたってアジアを侵略しつづけ、二千五百万人というぼう大な数の他国民を殺戮して、知らぬ顔をしてすましている。日本人自身も戦争で二百五十万の人間が死んでいる。こんなひどいことをしながら日本政府は日本人にも外国人の犠牲者に対しても何も戦後処理をしていない。

先にも言いましたように京都で行われた日本弁護士会の年次大会で、アジアの各地から戦争犠牲者の代表を呼んで、彼らの意見を聞いたことがあります。フィリピンや韓国の元

慰安婦の人たち、中国からも連行された労働者の人たち、日本のお偉い大学教授が、その悲惨な状態を聞いていましたが、聞いてやるという態度で、悪いことをしたのは五十年前の日本人で、私たちはそれを聞いてやっているとばかりにしか思っていない。人権のかたまりである筈の弁護士がこの程度です。フィリピンの代表の女性が「こんな悪いことをして後始末もしていない日本人が、国連の常任理事国になろうなんて、笑わすな」と叫んでいました。私は英語がわかるので思わず拍手しましたが、実際日本人であることが情けなくなりました。だから私は最後に五分間もらって言ってやりましたよ。「日本の政府は賠償や補償をする気があるのか、あなたの方弁護士会の人、日本がそうする気があると本気で思っ

ているのか」と。私は一介の素浪人ですから何でも言えます。日本人は口先だけで格好をつけて、放っておくわけにもいかなないから、見せかけをしているだけ。日本政府は絶対に賠償もしなければ補償もしませんよ。日本人は昔の恥という意識をすっかり忘れ去っている。日本の社会は一口で言うと金権腐敗資本主義です。みんなお金のことばかり、政治家、役人、みんなお金に冒されている。お金が必要なことはわかっています。だからと言ってそのために恥を忘れ、責任をまぬがれて平気でいってよい筈がない。あなた方は若くて清純な心をもっているのだから、社会にでてあんな風になってもらいたくない。見てごらん下さい。政治家などは自分のこと、自分の党とかのことしか考えていない。

あなた方はあなた方の曇りのない眼で日本の真実を見て下さい。本当だろうか、嘘ではないかと自分で考えてみて下さい。そして自分で考えたことが一番正しいのです。数が多から必ずしも正しくはないのです。

もうひとつのエピソード

— エリック・ロマックスのこと —

最後に泰緬鉄道についてもひとつのエピソードを話しておきます。実は私が泰緬鉄道当時に憲兵隊で、ある一人の捕虜を憲兵隊が拷問にかけた時、通訳として手伝ったことがあります。そして私はその当時のことを本に書き、その本を又、五年前前に英語で出版しました。その本を日本の『ジャパン・タイムズ』が記事にしました。ところがその記事がまわりまわって、相手の捕虜の目にふ

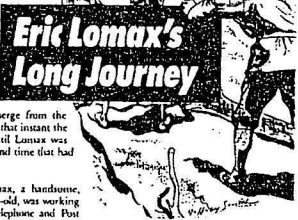
れたのです。三年前にその元捕虜の奥さんが私に手紙をくれ、「あなたがあの時の通訳か、私の主人はまだあなたを許していません。どう思っているか」という、きついきつい詰問の手紙をくれました。ひどい拷問でした。

その捕虜は私の目の前で拷問の烈しさにのたうちまわったのです。拷問の詳しい有様は女性の前では言えませんから略しますが、人間のすることではありませんでした。彼は、泰緬鉄道の詳しい地図を作り、持っていたのですが、それを収容所で私物検査のとき発見され、殴りになぐられ、スパイ容疑で憲兵隊で

ERIC LOMAX was filled with anxiety. The flight from Britain to Thailand had taken almost 12 hours, but his real journey to this remote area near the Burmese border had taken far longer.



The lanky, white-haired Scotsman watched as tourists crossed the infamous bridge over what is commonly known as the River Kwai a few hundred yards away. He wondered whether coming here again would be a terrible mistake.



After so many years of suffering, was he truly ready for this moment? Suddenly he saw a small, slightly stooped man emerging from the crowd. It was him. In that instant the years slid away, until Lomax was back in the place and time that had shattered his life.

Mentories of the horrors he'd suffered as a prisoner of war tormented him. One man in particular was the focus of his hatred

BY PAUL CHURCH

エリック・ロマックス氏と永瀬氏との美談は1994年10月号のReader's Digestに掲載され全世界の読者に深い感銘を与えた。

ンガポールの監獄でも、その場所その場所のでひどい拷問にかけつけられました。終戦になって、インドの病院で療養をつづけ、ようやく英本国に帰ったときは心身共にボロボロになっていたわけです。その上帰国してみると最愛の母は死亡し、父はすでに新しい女の人と結婚していたのです。そして幼なじみと結婚したのですが、何分にも捕虜当時に受けた拷問のため、社会生活がうまくゆかず、離婚し、看護婦だった今の奥さんと一緒になったのです。彼はロンドンの戦争拷問虐待犠牲者の第一号となり、治療をうけてどうやら現在回復していたところ、『ジャパン・タイムズ』の記事を見たのです。そして私のところに奥さんが手紙をくれたわけです。

私もその手紙をもらった時はしば

し呆然とし、次にウームとうなりましたね。岩波ブックレットに彼のことを書いた時は、彼はおそらく死んでいるであろうなと思って書いたのです。あの当時、私は目の前で、手足が折れた上に、なぐられ、水責めの拷問をかけられるのを見るに堪かねて「いいかげんに調査にサインをしたらどうか。見てはおれんから」とさとしたのですが、彼は淋しげにほほえんだだけでした。

それから私は手紙の返事を書き、日本軍を代表する気持ちで誠にあの時は申し訳なかった、人間としてすべきことでは無かったと、誠心誠意、謝りました。もっとも私自身は何も彼に肉体的な害は与えてはおりませんけれど。

それから一年半ばかり、お互いに文通し、ついに機がみのり、去る三

月二十六日、例の「戦場にかける橋」のふもとで、五十年ぶりに彼と再会しました。面と向かいあって立ったとき、お互いに何も言うことは無いのです。お互いに何か言ったようですが、その後只黙って、ただただ感激があるだけでした。私も五十年間、心に刺さっていたトゲが抜け落ちたような感じで、その時はお互いの人種、国境、あらゆるものは何もなく、ただ人間としての温かさだけが残り、いつまでも握手の手をはなさなかったものです。

エリック・ロマックス、彼はやがて、憲兵隊の前で、私がバンコックの軍法会議へ送られて行くとき、お前が私に言った言葉を憶えているか」ときくので、「いや、忘れた」と言いますと、「キープ ユア チン アップ」(Keep your chin up)、



顎を揚げておけ”、つまり、“元氣を出して頑張れ”という意味の言葉と言ったのです。そういえば捕虜たちの合言葉で、その当時私が聞きおぼえていたのを思い出しました。

私はあれから、日本兵からずいぶんひどい、手荒い仕打ちはうけたが、その時はいつもお前の言った言葉を思い出して堪えてきた、ありがとう”と私に話してくれました。そばで彼の奥さんも”もしあの言葉がなかったら、私の主人も、ここへ出



永瀬隆氏

て来て、あなたとはお会いしなかつたでしょう”と言ってくれました。(間)

私もこの話には考えさせられました。人間別れるときには必ずいい言葉で別れなければとの良い教訓を得たわけです。憶えておいて下さい。たとえば、あなた方が恋人と別れねばならないとき、そんなことがあつては困りますが、そんなときは哀しみをこらえて、最高に良い言葉を使って別れて下さい。そうすると彼はかえってくるかも知れない(笑い)。また老年になったとき、お婆さんになったとき、いい思い出が残るかもしれません。さて最後に校長先生、そして世話を与えて下さった森先生に感謝します。実は私はタイ国でクワイ河平和

基金というのをやっています。一千万円基金で、その利子が一割ももらえるので貧しい子供たちの勉強のために使われています。タイ国は物価が安いので、看護婦学校へ入っても全額の学費といつてもわずかです。ここでいただいたお金も基金に入れますので、それだけでも少女が一ケ年間、勉学できるわけです。今向こうで県知事の奥さんが、泰緬鉄道沿線の山岳部族の中から候補者をえらんでいてくれます。本当にありがとうございました。ええと、最後にお別れするときには最高にいい言葉でお別れしなければなりませんね。それでは日本で一番お上品な学習院が使っている言葉を使わせていただきます。

「皆さん、ごきげんよう。」  
(笑い、そして盛大なる拍手)